Human Rights
人権・同和教育だより

２０２２年度（２学期末号）

発行日：２０２２年１２月１９日
発行者：香川県立高松南高等学校
人権・同和教育部

◎生煮え豆腐の考察（人権・同和教育主任　山村智之）

今年の１０月に、某テレビ局で放送している地元の隠れた秘密やこだわりを紹介するバラエティー番組を見ていて、私は衝撃を受けた。それは何かと言えば**「香川県民は『生煮えの豆腐』を食べない」**という内容だ。今、この原稿を読んでいる香川県以外の出身の人は「何を読まされているんだ？」と思うかもしれないでしょう。しかし、私も子どものころから祖母や母親にそのように教わって育ってきたので、これは全国共通のことかと思っていた。まさか、香川県ローカルルールだったとは！冷たい冷奴はもちろん食べる、そのままで。でも、昔は鍋に入れると、よく煮えるまで無意識のうちに待ってしまっていた。今ではその「言い伝え」に根拠がないことは、経験上分かっている。もちろん、自分の子どもにそのように教えるつもりもない。補足をすれば、その番組でその理由について解説をしていたが、もともと香川県には大豆を栽培する風土がなく、豆腐は貴重なものだったとか。そして、保存の際に痛みが発生していた豆腐もあったことから、食あたりを防ぐためによく煮て食べようという文化が根付いていったのがその原因ではないかと大学の先生のまとめがあった。昭和の初めは冷蔵庫の普及の関係もあったのかもしれないが、なぜそのように言われてきたのか、その根拠が説明されて、スッキリはした。

さて、この「豆腐のこと」と「同和問題」というものも、思考の流れとしては同じなのではないか？と感じたのである。よく知らないけど、よく分からないけど、昔から親や祖父母からそう聞いてきた、という流れ。このように書くと偏見と言われそうではばかられるが、実際に人権・同和教育をしっかり受けていない年配の方々にとっては、同和問題についてマイナスのイメージが強いのではないかと思う。そして、その年代の方々から子どもへと、「〇〇のあたりは・・・」と負の連鎖が続いている。これが現状であろう。「寝た子を起こすな」の論調で、「学校でそんなことを教えるから今でも差別がなくならないのだ」という意見の方もいるでしょう。でもそれはやはり違う。「理由は分からない」もしくは「誰々がそう言っていた」という話も、しっかり学べばそれが間違いであって、けっして許されることではないことが分かるはず。だからこそ、今、学校で先生や生徒も一緒に学んで、何が正しいのか考えている。そして、学んだ生徒が家庭でも話をすることにより、親やその上の世代がさらに一緒に学びながら啓発をしていく。そして、それぞれの地域全体も啓発されていく、というのが理想ではないか。

寒い冬は、家族で湯豆腐の鍋を囲んで、このような話をしながら明るい社会を目指してみてはどうでしょうか？

◎２学期の人権・同和教育ロングホームルームの実践報告

１年生の学習活動　（学習課題：さまざまな差別）　主題　「差別と偏見」

１年生は、「性別にかかわる差別」、「民族にかかわる差別」、「LGBT（性的少数者）にかかわる差別」の３つのテーマをあげ、差別と偏見について学びました。自分は差別をしないと思っていても、気づかないうちに心の中にある思い込みや偏見が差別を生んでいることに、事例を通して気づく体験をしました。学習後の感想には「自分が当たり前だと思っていることが絶対ではなく、理解が不十分だと相手を傷つけることがあると気づくことができた」、「人を傷つけないためにもいろいろな見方・考え方が必要だと思った」という意見が多くありました。相手に対し正しい知識を持つことが、相手を尊重した行動につながるということを学ぶことができました。

※次の話、あなたは理解できますか？

路上で交通事故がありました。大型トラックが、ある男性と彼の息子をひきました。父親は即死でした。息子は救急車で病院に運ばれました。彼の身元を病院の外科医が確認しました。
外科医は、「息子！これは私の息子！」と悲鳴をあげました。

２年生の学習活動（学習課題：同和問題）　主題「水平社宣言に学ぶ」

2年生はDVDを視聴して、「水平社宣言」が誕生するまでの歴史を学びました。差別による劣悪な環境はみなさんにとっても衝撃だったのではないでしょうか。差別に苦しむ人たちが差別解消のため、水平社を設立したことを学び、差別解消に向けて行動した人々の気持ちについて考えましたね。難しい内容ではありましたが、部落差別や自分の心に潜む差別について、真剣に考えることで、現代に残る差別の解消に向け、自分にできることをクラスメイトと考えることができました。難しく考えず、差別に対しての正しい知識を持ち、差別を許さない心を持って欲しいと思います。

3学期は、水平社～現代までの歴史について学ぶ予定です。ぜひ、内容を覚えておいてくださいね。

３年生の学習活動（学習課題：同和問題）　主題「結婚差別をなくすために～」

３年生は、結婚差別について学習しました。本来ならば、結婚は、両性の合意のみでと憲法によって保障されています。しかし、親や親族から結婚したいという当人の思いを蚊帳の外にして、出身地や国籍、職種などを理由に縁談が円滑に進まない場合もあります。部落差別もその大きな要因となっていますが、正しく同和問題について学んでいくことで、そのようなことがなくなっていくであろうことを説明しました。

歴史を紐解けば、部落差別が現在のような問題として深刻化したのは、生徒の4代前にあたる高祖父あたりの明治時代から始まった話であり、江戸時代といった昔からの出来事ではないことや、正しく学んだ人たちが増えれば意識が変わること、「寝た子は起こすな」という論調は実質的な問題解決にならないことを確認しました。

自分たちが学べば（変われば）親世代が学ぶ（変わる）、親世代が学べば（変われば）、地域（社会）が変わる。だからこそ、今こそ「正しく学ぶ」ことが大切なんだと授業を締めくくりました。

◎南高祭・人権展

１年生は、１学期のなかまづくりに関するLHRで作成した、クラス目標をまとめたものを展示しました（写真１）。また、各クラスの人権委員を中心に、各クラスが考えた人権課題とその解決方法をまとめたものを展示しました（写真2）。特に2年１組が考えてくれた人権かるたは好評で、現在実物の制作に向けて取り組んでいます（写真3）。その他、香川県の教職員で作成する冊子「こみち」に掲載された香川県人権啓発ポスターを掲示したり、水平社創立100周年に関連した展示を行いました。

写真１

写真2

写真3

◎人権尊重都市たかまつ市民会議主催の人権作品展（12 月 6 日～11 日）に出展しました

コトデン瓦町ビル FLAG の8F市民交流プラザ　IKODE瓦町の人権展会場で作品が展示されました。

（１−5　浦尾　真之亮）

（１−5　森野　心音）

（１−6　村瀬　莉緒）

（2−6　酒井　理帆）

特集

◎「日々の授業から」　国語科教員　山岡　良子

私は国語の教員をしており、教科書でさまざまな文章を扱うのですが、ときどき人権感覚の観点から見ると気になる文章があります。例えば『十八史略』に「乃ち遺るに巾幗婦人の服を以てす」という一文があります。これは、かの有名な諸葛孔明が晩年に、魏の司馬懿と持久戦をしている最中、なかなか出撃しようとしない司馬懿に対して取った行動を描写したものです。現代語訳すると「婦人のつける髪飾りと婦人服を贈った」となるのですが、現代人の感覚からするといろいろ突っ込みどころがあるのではないかと思います。「それでも男か！」や「女みたいなヤツだなあ」などは、今でこそ言うのはおかしい台詞と認識されるようになりましたが、1800年前の中国では違和感なく使われていたものと思われます。そして、つい最近までその言葉で傷つけられた人が数知れずいたことでしょう。

21世紀の現在、時代は随分変わりました。前述の言葉も、男女差別だけでなくLGBTの人への配慮もあって、使われなくなってきたと思います。100%相手の立場にたって考えることは難しいけれど、だからこそ「何か自分の思いも寄らない困りごとがあるかもしれない」という気持ちを心の片隅において、他者と接するようにしていきたいと思います。